

分の内なる蘇峰を省みなければなら  
ないだろう。右翼か左翼かなどとい  
うつまらない話ではない。彼の生涯  
には、およそこの日本という後発的  
な近代国家に生きることの逃れられ



# 金子直吉

## 「財界のナポレオン」 は借家住まい

曾孫・鈴木商店記念館編集委員



ぬ条件が込められているのである。  
なお蘇峰は、良質の古典籍のコレ  
クション、成實堂文庫の主人でもあ  
る。ほんとうは時流に超然たる境界  
にあこがれていたのかもしれない。

明治末期から大正にかけて、三井  
物産と並ぶ総合商社として名を馳せ  
た鈴木商店。神戸の個人商店だった

同店を世界的な大企業へと発展させ  
たのは、店主・鈴木岩治郎の急逝後  
に経営を任された番頭・金子直吉  
(一八六六〜一九四四) だった。

実弟の曾孫で、鈴木商店記念館の  
編集委員として直吉の功績を研究し  
ている金子直三氏(67)が語る。

行きを考えていた。その先見の明に  
は、驚くばかりです。

直吉が先鞭をつけた産業として広  
く知られているのは、人造絹糸で  
す。明治末期、外国人居留地で初め  
て人絹に触れた直吉は、国産化を目  
指します。研究者を支援し実験工場  
を設立、人絹の工業化に成功する  
と、製造所を独立させました。それ  
が、帝国人造絹糸(現帝人)です。

他にも、特に私が注目しているの  
は、窒素から多量のアンモニアの合  
成を可能にする「クロード法」の特  
許権を、直吉が買取したことです。

アンモニアは当時、肥料や医薬  
品、軍需火薬の原料として、世界中  
の工業界でたいへんな注目を集めて  
いました。アンモニアの合成技術は  
確立されていたものの、従来の方式  
では合成量が少なく、採算があわな  
かった。そんな中、鈴木商店のロン  
ドン支店長・高畑誠一が、超高圧を

神戸製鋼所、帝人、双日、日本製  
粉、サッポロビール……。こうした  
名だたる企業の歴史をたどると、鈴  
木商店に行き当たります。直吉は鈴  
木商店の事業の多角化を推進し、化  
学や鉄鋼、鋳業といったさまざまな  
分野に進出。多いときには八十社を  
超える関連会社を抱えるほどの一大  
コンツェルンに成長させました。

しかし、こうした事業拡大は、決  
して金儲けや私利私欲のためではな  
く、高畑からの便りを受け取った直吉  
は、すぐに特許権の購入を決断しま  
す。特許料は五十万ポンド(約五百  
万円、現在の価値で約四億七千五百万  
円)。直吉は一九二二(大正十一)  
年、鈴木商店傘下にクロード式窒素  
工業という会社を設立し、二年後には  
合成アンモニアの生産を成功させ  
ます。こうした、一経営者にとどま  
らない直吉のスケールの大きさを、  
同時代を生きた実業家・福沢桃介  
(福沢諭吉の娘婿)は「財界のナポレ  
オン」と高く評価しました。

しかしその後、第一次世界大戦終  
結に伴う反動不況のあおりを受け、  
鈴木商店の経営状態は徐々に悪化し  
ます。一九二七年、ついに鈴木商店  
は破綻に追い込まれ、傘下の企業の

多くは既存の財閥系企業に移譲され  
ることになりました。  
破綻のときのエピソードにも、直  
吉の人柄がよく表れています。直吉  
は終生、借家暮らしを貫きました。  
目ぼしい家財道具は電話くらい。直  
吉は破綻に際し、自ら債権者一人一  
人に詫びて回り、示談を進めまし  
た。債権者側も、直吉の私欲のない  
人柄を理解していたため、債権の減  
額に協力してくれたそうです。  
直吉の肝いりで設立されたクロー  
ド式窒素工業は、何度か社名を変  
え、現在では三井化学の子会社・下  
関三井化学となっています。同社は  
東洋高圧工業時代の一九三四年には  
日本で初めて合成メタノール工場の  
操業を開始したり、尿素の生産を事  
業化するなど、日本の化学工業にお  
いて重要な役割を果たしてきました。  
直吉の挑戦は、日本の発展に大  
きく寄与することになったのです。

かったようです。鈴木商店はのちの  
大臣や企業経営者など、政財界に多  
くの人材を輩出しましたが、彼らが  
直吉についてどう語っているかを整  
理してみると、みな口をそろえて  
「私心のない人だった」と述べてい  
る。では、直吉はなぜこれほど多く  
の事業に乗り出したのか。その理由  
は、直吉が周辺に語っていたこんな  
言葉に現れています。  
「小さい山国で資源に乏しい日本を  
強大にするには、工業によるほかに  
道はない」

日本の将来を見据えていた直吉  
は、優れた工業製品を生産し輸出す  
ることが、日本が産業国家として世  
界に確固たる地位を築く礎となると  
考えていたのです。

生家が貧しく、十歳ごろから丁稚  
奉公に出た彼は、学校教育を受けて  
いません。そんな直吉が明治のころ  
からグローバルな視野で、日本の先